

【研究ノート】

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(XII)

原田 覺

本稿は下記拙稿に接続するものであり、以下に現代語訳する資料などについて、特に科文の全体的構成については下記拙稿(Ⅰ)を参照頂きたい。

「シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ)」『国士館哲学』10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20号、国士館大学哲学会、東京、2006(平成18)、2007(平成19)、2008(平成20)、2009(平成21)、2010(平成22)、2011(平成23)、2012(平成24)、2013(平成25)、2014(平成26)、2015(平成27)、2016(平成28)年

く23>【第1段落】「我慢と競争心と偈頌の賞味[と]によってでないのであるが| 重点としては他の典籍として錯誤することを捨離すべきが故[に]であるのであって| [何故ならば]著述者の名前を説かないならばチベット[人](68b7/69a1)が綴ったものに対して聖域(インド)の論書と錯誤してから偉大な方々のお名前を結び付けたことが見えること[がそうである]通り[に]なのである| 」と教示するのは| 」と[いい]「『大中[観]の二の[考え]方を完全に区分けし了ってから了義を一に集めたもの[たる]海の雲の甚深の雷(1/2)鳴』と言われるこれは| 」と[いう]のは| ご名義(お名前の意義)は最初に説示し了り終わったそれそのものであるのであるうえ| 最高の乗は中[観]の乗であって法の王の精舎 *khañ bzañ[s]*に往く様に為す最高の乗物と成ったものなのである| |

著者は典拠を明示しない二種類の主張を提示し、本著作の題目『了義を一に集めたもの[たる]海の雲の甚深の雷鳴』の意義「は最初に説示し」「た」とし、更に「最高の乗は中観」の乗であり、また「法の王の精舎に往」かさせる「最高

の乗物と成ったもの」「である」とする。

【第2段落】 瑜伽師と[いう]のは | (2/3)聞[学]と思[量と]の般若によって修行する者と[いう]意義であって | [何故ならば]般若それそのものによってその意義に対して習熟する様に為す[それがそうである]通りそのものによってなのである | |

更に著者は「瑜伽師と」「は」「聞」「思」「の般若によって修行する者」という「意義である」とし、その論拠として「般若」「そのものによってその意義に対して習熟」させる「通り」「なのである」とする。

【第3段落】 吉祥[なる]Śākya mchog ldan dri med legs paḥi blo は | 意義の為に飾ってから説いて | [何故ならば]主尊[で]瑜伽(3/4)の自在[者たる]Śākya rgyal mtshan dpal bzañ po のご恩恵から親近[し]得た名前を持つ者と成ったのである | |

著者は、自分自身の名前「は」「意義の為に飾って」「説い」とし、その論拠として、自分は Śākya rgyal mtshan「の」「恩恵」を頂き「親近」して「得た名前を持つ者」「である」とする。

<3 1 1>最初[の項目]は | 自己[による]空である見解によって増益を断じ了ってから他[による]空である実践すべ[く]為されるべき修習の[やり]方これは『現観莊嚴論頌』に於いて明白であるのであって | [何故ならば]三無生 skye med gsum に於いて聞[学]と思[量と]によって増益を断じる[やり]方(6/7)は母(般若波羅蜜多)の経の言葉が如何であれ[それがそうである]通りそのものをひたすらに受け入れることを基礎と為し了ってから | 修習すべく為すべきは | 「基礎が分かる諸区別 | |」と[いい] | 知[の]種類に付いて説示するが故[に]であり | 増益を断じるのも他[による]空である[やり]方それに於いてであるのであるのだ[と]想うならばマア | 瑜伽行(69a7/b1)者がそれに付いて注釈するけれども | 直接[的に]教示するべき[こと]に付いてでないのであって | [何故ならば]「色など[の]配置は住处[と]離れたりそして | | 色などは住さないそれらは | | その実体として自性が無い | |」と[説示し]たりそして | 「それらはその実体によって空で | | 色などは実体

性が無いそのものである| |][と](1/2)等[と説示し了り]そして| 特[に]第二品以下に自己[による]空である[やり]方が如何であれ[それがそうである]通りそのものとして説示したが故[に]である| |[]

著者は「自」「空」の「見解によって増益を断じ」「てから他」「空」の「実践すべき修習の」やり「方」「は」『現観莊嚴[論頌]』「に」「明白である」とし、その論拠として「三無生に於いて聞」「思」「によって増益を断じる」やり「方」は般若波羅蜜多「の経の言葉」「通り」に「ひたすらに受け入れることを基礎と為し」「てから」「修習す」「べき」こと「は」として一種類の教証を提示して「知[の]種類」として「説示」しているからであるとし、一方で敵者が「増益を断じるのも他」「空である」やり「方」「に於いてである」と「想うならば」それは誤りであり「瑜伽行者がそ」のやり「方」「に付いて注釈するけれど」その「注釈」は「直接的に」「教示するべき」こと「に付いてで」は「ない」とし、その論拠として、恐らく『現観莊嚴[論頌]』から更に二種類の教証を提示した上で「特」に「第二品以下に自」「空」のやり「方」「通り」「として説示」しているから「である」とする。

<3 1 2>第二[の項目]は| 見解[たる]自己[による]空と| 修習[たる]心の金剛[と]とに付いて説示するそれは Klu sgrub ご足下の『菩提心釈[論]』に明らかなのであつて| [何故ならば]増(2/3)益を断じた時[に]最初に他[による]空の[やり]方を詳細に説示し了ってから| それを修習によって実践する[やり]方を説示する時に| 修習すべく為されるべき空性それを事物[として]認識すること(無明)は| 「所縁とは離れた心である| |」と[いい]そして| 無常の心そのもの(3/4)は| |「空性と矛盾する[ように]成らない| |」と[いい]そして| 「ここに於いてであるならば諸仏陀の心を| |無常そのものとご承認する[ように]成ったならば| |空性と何故ご承認しないであろうか(ご承認する)| |」と[いい]そして| 「勝義[の]菩提[の]最高の心と| |如実性(真如)と真実[の]辺[と]| |無(4/5)相と勝義と| |法の界[と]は異門なのだ| |」と[いう]のはまた体験すべく為されるべきを説示する品に於いて生起し了り且つ| 要略としてならばこの論書に於いて心の金剛を修習すべく為されるべしと説示したことによってその意義に於いて錯誤[の]基礎(因)は無いのだ| |

著者は「見解」である「自」「空」と「修習」である「心の金剛」「に付いて」の「説

示」は龍樹「の」『菩提心釈[論]』「に明らかである」とし、その論拠として同論では「増益を断じた時」「最初に他」「空の」やり「方を詳細に説示し」「てから」「他」「空の」やり「方を」「修習によって実践する」やり「方を説示する時」「修習」「されるべき空性」「を事物」として「認識する」無明に付いて一種類の教証を提示し「無常の心」に付いて二種類の教証を提示した上で、以上を総括する一種類の教証を提示し、その教証「は」「体験」「されるべきを説示する品に」「生起」とし「し」以上を「要略」「して」『菩提心釈[論]』「に於いて」「心の金剛を修習す」「べしと説示した」ので「その意義に於いて錯誤」の因「は無い」とする。

＜3 1 3＞【第 1 段落】第三[の項目]は|『智心髓(5/6)集』に於いて|「事物(実有)と無事物[と]から解放され且つ| |事物と無事物[と]が完全[に]有る| |無変化[で]解放の最高| |意の自性[で]解放の住処| |何であれ[そう]であるのであるそれに於いて禪定により| |分別[の]心[の]輪を把握する[ように]為す者は| |衆生(6/7)と事物[と]の諸実体が| |理解される名前としてそれを詮説するのだ| |無事物[である]空は虚空[と]同様[で]| |無いことを全く捨離したことは| |最高の真実性であって離脱する[ように]願望する者達は| |大なる錯誤と無明[と]が住するのであるのであるのだ| |」と修習すべく為されるべき智の心髓を事物[として](69b7/70a1)認識し「てから| 真実性に於いて禪定を為すと仰せになったことそして| その見解を決定する[ように]為す道理は自己[による]空そのものを重要[である]と説示したのであるのであって| [何故ならば]「その識も勝義として| |有ると学者方は同意しなくて| |(1/2)[何故ならば]一と多[と]の自性と| |離れたが故[に]であり]虚空の蓮華[がそうである]通り[に]である| |」と生起するそれそのものののだ| |

著者は『智心髓集』から一種類の教証を提示し「修習」「されるべき智の心髓を事物」として「認識し」「てから」「真実性に於いて禪定を為すと」言い「そして」「その見解を決定」させる「道理は自」「空」「を重要」である「と説示した」とし、その論拠として他の一種類の教証を提示し「その」通りであるとする。

【第 2 段落】阿闍梨[たる]獅子賢が寂護ご父子のお考えに付いて説示する瑜伽の第四の地そこに於いても増益を断じる[ように]為す道理[たる](2/3)究竟は自己[による]空であって| [何故ならば]如何[であれ]話として|

「それはまた縁起であるのであるが故[に]幻[が]そうである」通りに実体性は無くして| 」と二[として]無い慧は自己の実体によって空であると成就し了りそして| 修所成[慧]sgom byuñ [śes rab]の瑜伽を説示する時に| 修習すべきことによって(3/4)修習すべき力が成立した時に幻の如き自己自身として顕現する知覚を全く[の]無分別[たる]個別[的]に自己により証悟することであると体験する[ように]為されるべき[こと]が分かると説示したが故[に]であり| Ka ma la śī la の『修習次第』sGom rim(北京版 No. 5310~2)もその意義そのものから脱し了らなくて| [何故ならば]詳細にそれそのものに付いて見るべきだ| |(4/5)

著者は「獅子賢が寂護」と蓮華戒と「の」「考え」を「説示する瑜伽の第四の地」「に於いても増益を断じ」させる「道理」たる「究竟は自」「空であ」とし、その論拠として典拠を明示しない一種類の教証を提示し「無」「二」の「慧は自己の実体によって空であると成就し」た上で「修所成」慧「の瑜伽を説示する時」「修習」「によって」「修習」の「力が成立した時に幻の如き自己自身として顕現する知覚を」「無分別」たる「個別」的「自」「証」「であると体験す」「べき」ことであると「分かると説示したが故」「であ」とし、更に蓮華戒「の」『修習次第』「も」同一の「意義」「から脱し」ていないとし、その論拠として「詳細に」「修習次第」を「見るべきだ」とする。

【第3段落】このことに付いて後のチベット人達が思ったことは| 中[観]帰謬派達の修所成智もそれと同様であって| [何故ならば]そこに於いて自己[による]証悟をのみ否定するけれども| 等引した智の経験する[ように]為されるべき[こと]を否定していないが故[に]であり| その想定 sñam pha/pa によってはその[考え]方は徹底的に分からないの(5/6)であるのであって| [何故ならば]中[観たる]見解の修習は住する[やり]方(本性)を思惟することに入った修習であるのであるうえ| その時[に]対境は無いと否定するべき[もの]或は虚空の如くに成ったもの[が]そうである」通りに| 有境[たる]智もそれと同様に無所縁であると説示するけれど| 分かること(知)そのものも有ると承(6/7)認しないが故[に]であり| それ[たる]話として| 『百[字論]』から| 「[渴]愛と離れたるうえ[解]脱した時[に]|| 分かる[こと]が有[っても]何程の功德が有ろうか| 分かる[こと]が無いことの有ることも| 明らかに有ることでないのである[こと]と相応する| 」と[言

い]そして|『入行[論]』に|「如何なる時[にも]実有(事物)と無実(70a7/b1)有[と]等は| |知覚の前に住しないもの[で]| |」と[言う]ことによって対境は無いことそして|「その時[に]他の行相は無いので| |所縁が無しに全く静止する| |」と[言う]ことによって有境の知の所縁そのものであると説示したが故[に]そして|『入[論]』に於いて|「知る[ように]為されるべき(所知の)護摩木[で]乾(1/2)燥した一切を| |燃したので| |知りそして| |静止する」と[言う]ことによってその意義そのものを教示したのだ| |

著者は、前段落の主張に「付いて後」代「のチベット人」たる敵者「達」の主張「は」「中」観「帰謬派」「の修所成智も」前段落の「修所成」慧「と同様である」とするとし、その論拠として「修所成智」「に於いて自」「証」「を」「否定するけれど」「等引した智の経験」「されるべき」こと「を否定していないが故」「である」とし「その」敵者の「想定」「は徹底的に分からない」とした上で、その論拠として「中」観の「見解の修習は」本性「を思惟することに入った修習である」「うえ」「修習」「の時」「対境は無いと否定するべき」ものや「虚空の如くに成ったもの」である「通りに」「有境」の「智も」「対境」「と同様に無所縁であると説示するけれど」知「も有ると承認しないが故」に「である」とし『百[字論]』と『入行[論]』と「から」各一種類の教証を提示して「対境は無い」とし、更に『入行[論]』から一種類の教証を提示して「対境」は「有境の知の所縁」「であると説示したが故」にであるとした上で『入[論]』から一種類の教証を提示して、同一の「意義」「を教示し」ているとする。

【第4段落】その如く[に]説示した時に| 言説としてもお体と智[と]を捨離しる様に成るのだ[と]想定することそれによつては| 勝義を因由として配置し了ってから世俗を破折することそのものとして確定していることにより| (2/3)如何であれ話として|「諸仏陀が法を教示したのは| |二の諦に真実は依存すべく| |」と言う前部(立論者)なのだ| |その部(立論)はチベットの中[観]として了承される全て[の人]が承認したので| |その時に増益を自己[による]空の道理によって断じ了ってから| (3/4)体験を他[による]空の智に於いて為すその意義を承認した[それがそうである]通りに言説は了解されないのだ| |

著者は、前段落の主張を「説示」する「時」「言説としても」「体と智」と「を捨

離す「る様に成る」と「想定すること」「によって」「勝義を因由として配置し」「てから世俗を破折する」「と」「確定している」のどとして、典拠を明示しない一種類の教証を提示し、その教証が論争に於ける立論であり「その」立論「はチベットの中」観「として了承される全て」の人「が承認したので」「その時」「増益を自」「空の道理によって断じ」「てから」「体験を他」「空の智に於いて為す」「意義を承認した」「通り」で「言説は了解されない」とする。

<3 2>第二[の項目]は| インド[と]チベット[と]においでになった学[者と]成就[者との]全ての教授の典籍から了義の修習すべく為されるべき究竟は心の金剛それそのものに対してご承認になることであるのであって| (4/5)[何故ならば]六支の瑜伽に於いて説示された空性それと|『秘密集[会]』の五の次第と| Nā ro[hī]の六の法[と]に於いて勝義諦であると説示された光明の次第それと| 総摂輪(勝樂)の五の次第から不可思議の次(5/6)第として説示されたそれと| Ye śes ご足下[の考え]方(ジュニャーダパーダ流)に於ける勝義の識別を甚深[と]光明[との]二[として]無い智に付いて説示し了ってから甚深を直接に於いて否定すべきをお為しになることそれと| 瑜伽自在[天]が本当に戯論が無い(無戯論)教授に於いて体験すべく為されるべき戯論が(6/7)無い智に付いて説示したうえ| それ一切はお名前を個別[的]に付けられたけれども| 意義は俱生した心の金剛それそのものを修習すべきことによって体験すべく為されるべき[こと]と説示することに於いて意義が一致するものであるのであって| [何故ならば]円満次第の甚深の教誨それ等が如何であるのであっても宜しく| 初めに(70b7/71a1)四の灌頂あるいは| 本当に鋭利な[機]根に対する加持の次第のみに依存し了ってからも現前になった体験の智それそのものの保持する[ように]為すこと(保持者)そのものから脱し了らないが故[に]であり| チベットの偉大な成就者たちに共許である静まる[ように]為す Shi byed[派の?]|心が(1/2)説明される教授と| 大円満 rDzogs chen[の]心部 Sems phyogs に於いて共許であること等と| Sa ra ha の Do ha 蔵の歌と| 大手印[で]俱生した智を解説する教授[との]一切も最後のご教誨の了義を体験すべく為されるべき[こと]と説示することから外[に](2/3)無いのだ| |

著者は「インド」と「チベット」の「全ての」「学」者と「成就」者の「教授の典籍」によるならば「了義の修習」「されるべき究竟は心の金剛」を「承認」す「ること

である」とし、その論拠として「六支の瑜伽に」「説示された空性」「と』『秘密集[会]』『の五の次第』や「Nā ro の六の法」「に」「勝義諦」「と説示」する「光明の次第」「と」勝樂「の五の次第」に「不可思議の次第」と「説示」したもの「と」ジュニャーダパーダ流で「勝義の識別を甚深」と「光明」の「無」「二」の「智」として「説示し」「てから甚深を直接に」「否定」させる「こと」「と」「瑜伽自在」天「が本当に」無戲論の「教授に」「体験」「されるべき」無戲論の「智」を「説示」することと「その」「一切は」「名前を個別」「に付け」ている「けれど」「意義」として「は俱生した心の金剛」「を修習す」る「ことによって体験」「されるべき」こと「と説示」しているので「意義が一致する」とし、更にその論拠として「円満次第の甚深の教誨」「が如何であ」れ「初めに四」「灌頂」や「本当に鋭利な」機「根」に対する加持の次第」「に依存し」「てからも現前になった体験の智」「の」保持者「から脱し」「ないが故」「であ」とし、更にその論拠として「チベットの」「成就者たちに共許である」「Shi byed」派の「心が説明される教授と」「大円満」の「心部に」「共許であること」「と」「Sa ra ha の Do ha」「と」「大手印」で「俱生した智を解説する教授」との「一切も最後の」「教誨の了義を体験」「されるべき」こと「と説示する」以「外」では「無い」とする。

【第 2 段落】後のチベットの中[観の]見解[の]指導によっても以前の意義(?)それは同意されず[それがそうである]通りに承認され了って| [何故ならば]「再三に思うことそして| |分析しそして正[しく]分別する[こと]を修習する道| |」と[いう]経教を根拠と為し了ってから空性が了解される知覚の相続を修習するべく為されるべき[こと]そのものとして(3/4)承認されたが故[に]なのだ| |

著者は「後」代「のチベットの中」観の「見解」「指導」「も以前の意義」に「同意」しない「通りに承認され」とし、その論拠として典拠を明示しない一種類の「経教」を提示し、その「経教を根拠と為し」「てから空性が了解される知覚の相続」が「修習」「されるべき」こと「として承認されたが故」にであるとする。

<3 3>【第 1 段落】『呼金剛[続]』[の]根本[と]注釈 ḥbrel/ḥgrel[と]と| 『時の輪』[と]から| 自己[による]空の見解によって増益を断じ了ってから| 他[による]空の智を修習するべく為されるべき[こと]として説示したのであるのであって| [何故ならば]如何であれ(4/5)話として| 「瑜伽行それから

後に| 「そ[の]後で中[観]を教示すべき様に為されるべし| 」と[いう]こと
によって増益を断じた見解と| 「そ[の]後で『呼金剛[続]』を教示すべし|
|」と[いう]ことによって双運する智[と]を修習するべく為されるべき[こと]
と教示したことと| 『時[の]輪』*Dus hkhor*で「[五]蘊を全く断じた空」(5/6)
と[いう]意義を中[観]の道理によって決定された空性と| 体験すべく為さ
れるべき[ことと]に対して全ての最高の行相を備える[ものという]名前によ
って教示したが故[に]なのだ| |

著者は『呼金剛[続]』の「根本」と「注釈」や『時の輪』「から」「自」「空の見解
によって増益を断じ」「てから」「他」「空の智を修習」「されるべき」こと「として
説示した」とし、その論拠として典拠を明示しない二種類の経/教証を提示し、
その各々が「増益を断じた見解と」「双運する智」と「を修習」「されるべき」こと
「と教示したこと」そして『時[の]輪』の五「蘊を全く断じた空」の「意義を中」
観「の道理によって決定された空性と」「体験」「されるべき」こと「に対して全
ての最高の行相を備える」ものという「名前によって教示したが故」にである
とする。

【第2段落】その意義そのものは主尊者[たる]Sa skya paが詳細に説示す
ることなのであって| 「何故ならば」それ等の典籍に於いて辺[と]離れた
(離辺)と決定し了って(6/7)から双運に修習すべきことと説示するうえ|
その時[に]決定する[ように]為すのは龍樹ご足下の木車の車轍から生起する
諸道理であるのであるうえ| 体験すべく為されるべきは続部から生起する
双運[でそれ]は| 楽[と]空[と]或は| 明[と]空[と]或は| (71a7/b1)方便
[と]知[と]或は| 二の諦は双運するものであって| 「何故ならば」自性の
『喜金剛』等[の]名前の十四の異門によって説示されたものそれそのもので
あるのだ| |

著者は、前段落の「意義」「は」Sa skya pa「が詳細に説示する」とし、その論
拠として Sa skya pa「の典籍に於いて」離辺「と決定し」「てから双運に修習す
べし」と説示し「その時」「決定」させる「のは龍樹」「の木車の車轍から生起す
る諸道理であ」り「体験」「されるべきは続部から生起する双運」でそれ「は」
「楽」と「空」や「明」と「空」や「方便」と「知」や「二」「諦は双運するものであ」と
し、その論拠として「双運する」それ等は「自性の」『喜金剛』「等」に於ける「名

前の十四の異門によって説示されたもの」「である」とする。

【第3段落】双運の意義も | 二として差別が無いこと(無差別)に対して説示する必要があることであるのであるが | 合一(1/2)と名前を付け了ってから二として有るものに付いて説示するそれは本当に迷乱しているのだ | []

著者は、前段落の「双運の意義も」「二として」無差別である「こと」「に対して説示すべきことである」のに「合一と名前を付け」「てから二として有るもの」に付いて説示する」の「は本当に迷乱している」とする。

【第4段落】差別が無い[こと]の説示する[やり]方に二あって | [何故ならば]中[観で]自己[による]空[論]者が方便[と]空性[と]に付いて一の味であると説示することと | 密咒者が空性[と]方便[と]に於いて一の味であると(2/3)説示すること[との]二から | ここに於いては後[者]が強力であるのであるうえ | その時[に]楽[と]空[と]そして明[と]空[と]等[は]他[による]空の支配したものであるものであって | [何故ならば]方便[と]楽と | 明と悲愍[と]等[は]同意されないことを基礎として設定し了ってから | それを所取[と]能取[と](3/4)として固執することによって空と説示する必要があるが故[に]であり | その双運は言説の時[に]勝義の諦として承認する必要があるものであって | [何故ならば]他としてである(そうでない)ならば体験する知覚が世俗分に成り了ったことによって無明あるいはそれによって染められた何であれ可(よい)ものから脱しなかったことに成り了るが故[に]であり | (4/5)辺[と]離れたと決定する[ように]為す道理その面に於いては勝義の諦と言うことを承認しないのであって | [何故ならば]主尊[者たる]ご兄弟が | 如何であれ話として | 「異門のものでないのである勝義諦に対しては論書をお造りになった阿闍梨方が能立[因]を(5/6)仰せにならなかったのだ | その如く[に]それが有るのだと認識し了る様に為されるべきでないのだ | 」と仰せになったのだ | |

著者は、前段落の無差別を「説示する」やり「方に二あ」とし、その論拠として「中」観「自」「空」論「者が方便」と「空性」「に付いて一」「味であると説示することと」「密咒者が空性」と「方便」「に於いて一」「味であると説示すること」の「二」の内「ここ」で「は後」者「が強力である」とし、更に「その時」「楽」と「空」

や「明」と「空」「等は他」「空の支配したものである」とし、その論拠として「方便」と「楽」や「明と悲愍」「等は同意されないことを基礎として設定し」た上で「それを所取」と「能取」として固執することによって空と説示する必要があるが故」に「であ」とし、前段落「の双運は言説の時に」「勝義」「諦として承認する必要がある」とし、その論拠として、そうでない「ならば体験する知覚が世俗分に成」「ったこと」で「無明」や「無明」によって染められた何」か「から脱しなかったことに成」ってしまう「が故」に「であ」とし、また離辺「と決定」させる「道理」「の面に於いては勝義」「諦と言うことを承認しない」とし、その論拠として「主尊」者たる Sa skya pa「兄弟」の典拠を明示しない種類の教証を提示する。

【第5段落】然らばその品に於いて「勝義の性相[の]基礎(事相)はこれなのだ」と認識した[こと]として無いので| 中[観で]実体性は無い[派]より特別に聖(殊勝)である」と説示されたそれは何故かというならば| 「そ[の]後で『呼金剛[続]』を(6/7)教示すべし| 」と[いう]ことによって| 中[観]と[いう]体験すべく為されるべき双運それは無いことによってなのだ| |

著者は、前段落の著者の主張に対する疑問として「然らば」Sa skya pa「兄弟」の典拠を明示しない種類の教証「の品に」「勝義の」事相「はこれ」「と認識」でき「無いので」「中」観「無」「実体」派「より特別に」殊勝「であると説示された」理由「は何」かと自問し、自答して第1段落と同一の典拠を明示しない種類の経/教証を提示し「中」観「と」という「体験」される「べき双運」「は無い」が故にであるとする。

【第6段落】然らば識別した[こと]として無いのは何故かというならば| 少女の[安]楽と喋れない[人]の夢[と]等の喩[例]によって詮説[と]離れたと説示したならば識別した[こと]として何に於いて有ろうか| []

著者は、更に「然らば識別」でき「無いのは何故か」と自問し、自答して「少女の」安「楽と喋れない」人「の夢」「等の喩」例「によって」「離」言「説」である「と説示したならば識別」できることとして「何」として「有ろうか」無いとする。

【第7段落】然らば| 主尊[者](71b7/72a1)のその仰せの暗示に於いて|

中[観]派が勝義の何等かの諦を識別すると説示したことでないのか
| [説示したこと]であるのであるならばマア引用したや否やそれと矛盾するのだ |
| と[いう]ならば | 中[観]派によって異門の何等かの勝義諦は識(1/2)別された[こと]であるのであって | [何故ならば] **Ye śes sñiñ po** が |
「生まれること等を否定したことも | 勝の義と一致するが故[に]同意する |
|」と[説示し]そして | 月[称]が | 「全ての事物は真実[と]虚偽[と]が見えるので |
| 事物は獲得される | 」と説示したのだ | |

著者は、更に「然らば」「主尊」者 **Sa skya pa**「の仰せの暗示」は「中」「観」「派」が「何等かの」「勝義」「諦を識別すると説示した」「のであ」ろうので、そう「であるならば」「暗示」として「引用した」と同時に自己「矛盾する」と自問し、自答して「中」観「派」は「異門の何等かの勝義諦」を「識別」し「た」とし、自答の論拠として **Ye śes sñiñ po** と「月」称の典拠を明示しない各一種類の教証を提示する。

【第8段落】無上の続の現(2/3)観これに於いては同分すらも聞[学と]思[量と]の道理によって識別されなくて | [何故ならば] 修[所]成[慧/智] **sgom/bsgoms byuñ** の知が体験する[ように]為されるべき何であるのであれそれは識別した[こと]として無く且つ一切の詮説と離れたのだ | |とのみ丈から他は説示しないが故[に] | [] (3/4)

著者は、前段落の自答を続けて「無上の続の現観」「に於いては同分すらも聞」「思」「の道理によって識別されな」とし、その論拠として「修」所「成」「の知が体験」「されるべき何」か「それは識別」でき「無く且つ一切」「離」言「説」である「とのみ」以外「は説示しないが故」にであるとする。

【第9段落】然らば | 見解により自己[による]空に確定し了ってから | 修習により他[による]空を実践した時[に] | | 聞[学と]思[量と]と実践[と]は無関係となったのでないのか | と[いう]ならば | 過失は無く | [何故ならば]聞[学と]思[量と]の道理それは実践すべく為されるべきそれに対して相[として]執着する分別を否定する **hgog** (4/5) **pahi** 方便であるのであることによるのだ | |

著者は、更に「然らば」とし「見解により自」「空に確定し」「てから」「修習により他」「空を实践した時」「聞」「思」「と実践」「は無関係」「でない」「のか」と自問し、自答して「無関係とな」る「過失は無」いとし、その論拠として「聞」「思」「の道理」「は実践」「されるべき」こと「に」「相」として「執着する分別を否定する」「方便である」「ことによ」ってであるとする。

【第 10 段落】それによるならば了義[たる]双運それは| それに於いて増益を断じる道理その面に於いて自己の実体性によって空であるが| 修[所]成の智それが破壊すべく gshig/gsig 且つ滅除すべく出来なくて| [何故ならば]出来るならば金剛そのものに矛盾するが故[に]なのだ| |

著者は、前段落の主張「によるならば」「了義」の「双運」「は」「双運」「に於いて増益を断じる道理」「の面に於いて自己の実体性によって空である」けれど「修」所「成の智」「が破壊」し「滅除すべく出来な」として、その論拠として「破壊」し「滅除すべく」「出来るならば金剛」であること「に矛盾するが故」にであるとする。

【第 11 段落】然らばこの[考え]方(5/6)に於いて聞[学と]思[量と]が増益を断じた意義それそのものを体験すべく為されるべきと説示しないことは何から分かるのかと[いう]ならば| 親口[道果]gsun' nag の典籍[と]注釈[と]等で空性の九区分を説示し了ってから| 聞[学と]思[量と]が増益を断じた空性に対して有毒[と]そして(6/7)具全種最高 rnam kun mchog ldan の空性に対して無毒と説示したことからののだ| |

著者は、更に「然らば」とし前段落の主張「の」考え「方に於いて聞」「思」「が増益を断じた意義」「を体験」「されるべきと説示しない」の「は何から分かるのか」と自問し、自答して道果「の典籍」と「注釈」「等で空性の九区分を説示し」「てから」「聞」「思」「が増益を断じた空性に対して有毒」「そして具全種最高の空性に対して無毒と説示したことから」であるとする。

【第 12 段落】その理解はまたそれは無いと否定すべき有境の或る知が何かに対して生起したとしても| 言葉[の]意義を認識する分別から離脱し了っていないとお考えになったのだ| |

著者は、前段落の「有毒」「の理解」を解説して「それは無いと否定す」る「有境の」「知が何かに対して生起し」「ても」「言」「義を認識する分別から離脱し」「ていないと」**Sa skya pa** が「考え」「た」「区分」であるとする。

【第 13 段落】また成就法の諸典籍に| (72a7/b1)無所縁であって空である| と[いい]そして| 空の本性から| と[いう]等[の]二の部分[で]その前者は自己[による]空の道理そして| 後者が実践するのは他[による]空の[やり]方と教示したのだ| |

著者は「また成就法の諸典籍に」として、第一に「無所縁であって空である」のと、第二に「空の本性から」のとの「二の部分」「の前者は自」「空の道理」「と教示し」「後者が実践するのは他」「空の」やり「方と教示した」とする。

【第 14 段落】それ[が]そうである]通りに主導[者]が| 『不可思議の教授』*bSam mi khyab kyi man ñag* で| 「見解によって戲論を(1/2)断じる時[に]| 六種の無いと| 修習の時に六種の有るが重要である」と仰せになったそれによっても| 聞[学と]思[量と]と修習[と]によって実践すべく為されるべき[ことと]は相応しないと説示したのでないのであるのだ| |

著者は、以上の主張の「通り」であるとし『不可思議の教授』から一種類の教証を提示し「主導」者 **Sa skya pa** は「聞」「思」「と修習」「によって実践」「されるべき」ことと「は相応しないと説示したのでない」とする。

【第 15 段落】それ[が]そうである]通りに『不可思議』*bSam mi khyab* と| 『仏塔ご前で得る教授』*mChod rten druñ thob kyi man* (2/3) *ñag* と| 『語の自在[と]著名な大手印』*Ñag gi dbañ phyug grags pañi phyag rgya chen po* [と]等[の]迂回路として著名なあらゆる教授に於いて体験する見解が通達される方便を自己加持すべき *byiñ gyis rlab/brlab pañi* 次第に於いて説示し了ってから| 体験する[よう]為されるべき自然の智に付いて説示したのみそのものとして(3/4)確定するので| 最後の[法]輪と弥勒[の]法[と]の見解に対して唯心と誹謗すべく為されるべきでないのだ| |

著者は、更に『不可思議』『仏塔ご前で得る教授』『語の自在[と]』著名な大手印』『等』の「迂回路として著名なあらゆる教授に於いて体験する見解が通達される方便を自己加持すべき次第に於いて説示し」「てから」「体験」「されるべき自然の智に付いて説示したのみ」「として確定するので」「最後の」法「輪と弥勒」「の」「法」「の見解に対して唯心と誹謗」「されるべきでない」とする。

【第 16 段落】主尊[者]はこれ等の見解[と]宗[義と]の品に於いて| 顕現は心| 心は幻| 幻は無自性と言う三[項目]と| 輪廻と| 涅槃と| (4/5) 無別[と]と言う三[項目]と| 顕現と| 空と| 双運[と]と言う三[項目]と| 明と| 空と| 双運[と]と言う三[項目との四]組の門から説示したうえ| それ等は主尊[者たる]弥勒の中間の典籍から生起するのであるのであって| [何故ならば]如何であれ話(5/6)として| 「所縁に依存し了ってからに於いて| |」と[いう]ことによって最初の諸[項目を]そして| 「無所縁は完全に生じる| |」と[いう]ことによって第二の諸[項目を]そして| 「その如きによるならば所縁と| |無所縁[と]は平等であると分かる様に為されるべし」と[いう]ことによって第三の諸[項目]を教示したのだ| |

著者は、前段落の諸「教授」「等の見解」と「宗」義「の品に於いて」「主尊」者 Sa skya pa が「顕現は心」「心は幻」「幻は無自性と言う三」項目「輪廻」「涅槃」「無別」「と言う三」項目「顕現」「空」「双運」「と言う三」項目「明」「空」「双運」「と言う三」項目で、計四「組の門から説示した」けれど「それ等は主尊」者たる「弥勒の中間の典籍から生起する」とし、その論拠として典拠を明示しない「弥勒の」三種類の教証を提示してそれ等が各々「最初の諸」項目「第二の諸」項目「第三の諸」項目「を教示した」とする。

【第 17 段落】それはまた句[で] (6/7) 最初[の]二によって決定する[ように] 為す道理[を]と| 後[の]二によって修習によって体験する[やり]方[と]を教示したのだ| |

著者は、前段落の四「組の門」の内「最初」の「二」「句」「によって決定」させる「道理」を「後」の「二」「句」「によって」「修習によって体験する」やり「方」「を教示した」とする。

【第 18 段落】それ[がそうである]通りに顕現は心[と]分かることによって所取[たる]遍計[所執性]は無いと通曉できて| [何故ならば]それによって外側の対境が破滅し[る]が故[に]であり| (72b7/73a1)心は幻と[いう]ことによって依他[起性]は幻の如しと通曉できて| [何故ならば]それ[たる]時の心は不浄の顕現が出現する者それ自身に於いて為すが故[に]であり| 幻は無自性によって体験すべく為されるべきは円成[実性]と分かるので(1/2)あるのであって| [何故ならば]俱生の智は詮説[と]離れたと通達するが故[に]であり| その如くであるならばまた| 見解が通達される方便は二であって| [何故ならば]波羅蜜多乗の道理と| 密咒の自己加持[と]なのだ| |

著者は、第 16 段落の四「組の門」の「最初」の「句」を取り上げ「顕現は心」と「分かることによって所取」たる「遍計」所執性「は無いと通曉でき」とし、その論拠として「それによって外」「の対境が破滅し」てしまう「が故」に「である」とし、また「心は幻と」という「ことによって依他」起性「は幻の如しと通曉でき」とし、その論拠として「その」時の心は不浄の顕現が出現する者「自身に於いて為すが故」に「である」とし、また「幻は無自性によって体験」「されるべきは円成」実性「と分かる」とし、その論拠として「俱生の智は」言「説」と「離れたと通達するが故」に「である」とし、更に以上の「如くであるなら」「見解が通達される方便は二である」とし、その論拠として「波羅蜜多乗の道理と」「密咒の自己加持」と「の」二であるとする。

【第 19 段落】道理に於いてまた| (2/3)自己[による]空の[道理]と| 他[による]空の[道理との]二から| 道理の面からは波羅蜜多より優れているのは密咒のものであると説示する因は無いけれども| 方便の面から優れているのであるのであるうえ| 修習によって体験すべく為されるべき了義は一義に集まるので(3/4)あるのであって| [何故ならば]自然[で]俱生の智それそのものに付いて説示するが故[に]であり| その意義に付いてお考えになってから| 「然しながらまた戯論と離れた通達の| | 方便に於いて密咒は特別に聖である| |」と仰せになったのだ| |

著者は、前段落の「波羅蜜多乗の道理」「に」「自」「空の」道理「と」「他」「空の」道理の「二」がある内「道理の面からは波羅蜜多より優れているのは密咒のものであると説示する因は無いけれど」「方便の面から」「密咒のもの」が「優れて

いるのである」し「修習によって体験」「されるべき了義は一義に集まる」とし、その論拠として「自然」で「俱生の智」「そのものに付いて説示するが故」にであるとし、更に「その意義に付いて」「主導」者 **Sa skya pa** が「考え」たであろう典拠を明示しない種類の教証を提示して本文を終了する。

回向偈：ここに於いて述べたことは|

何の(4/5)威力によってであれ了の何の義に付いてであれ| |授記すべく出来る後ろ盾たるべき沢山の経教伝承[で]| |道理[の]理路そのものから引証した最高の道理を| |教示する[ように]為さった文殊[菩薩]に敬礼を致しますべし| |

何者であれまたここに於いて我と法[と]に愚昧な暗黒(5/6)によって責められた **bstibs/bstins** 昏沉の寝所などで| |煩惱と虚妄分別[と]の酔う[ように]為す[もの]によって酔う時[に]全種[相](完全)に入睡してから| |幻によって愚昧に為された夢[の]境の迷乱の種々の顕現に貪愛する者を| |(6/7)道理に目覚める[ように]為す極熱[の]智[たる]太陽の顕現が昇る[ように]お為しになる彼は[無上]正等覺者([阿耨多羅]三藐三仏陀)である| |

吠陀を憶念することによって永遠を思った[ように]為したが| |伺察する対境として決して升起しなかった| |全ての衆生を甘露と為す無(73a7/b1)死[の]道[たる]| |二種の偉大な[車]轍は何者であれこの福分によって獲得されるべし| |

等覺者は知覺の経教伝承によって親しく書いた| |黄金[の]文字をお首に持つ使者[で]| |経教[と]道理[と]を如理[に]学び了った戒律の僧[たる]| |沢山[の人々]の(1/2)座首として次第[が]そうである[通り][に]安樂に遊行する| |

二の[やり]方[たる]木[車]を導く御者が| |道理に導いた車の第三の轍[たる]| |最後の[法]輪の了義を勝者のご子息は| |上向きに設置する奇怪さこれを見よかし| |

その(2/3)善によって我と[衆]同分[たる]| |沢山[の人々]が永遠[の]時から集積した| |法を捨離すべき過失によってこの寿命に於いて了の義を| |如理[に]見る障礙それが清浄になり了る[ように]成り了ってから| |無辺[の]福德資糧と(3/4)結合した| |解消する道理によって相に執着する| |全ての戲論を滅除し了ってから双運する法のお身体の| |無上の地位それが獲得されるべき様に回向すべし| |

奥書：(拙稿Ⅰに於ける現代語訳を参照頂きたい)

結頌Ⅰ：『了義[たる]法の(73b7/74a1)海からやって来た| |経教[と]道理
[とたる]雲[と]青[空と]を享受する虚空に於いて| |善しく説示された甚深
の雷鳴』と宣言したこれは| |三域(天、地、地下)[の]九生(衆生)の耳の莊
嚴を(1/2)為せかし| |

ここに於いて **Śākya** の経典を読誦する方々の| |最高である **mchog** と聞き
やすい名声を沢山[に]具える **Idan pa**| |**Dri med Legs pa**hi blo gros よ、あ
なたのみ足は| |信仰による頭の莊嚴として我によって依止されるべし|
|(2/3)

何の智慧の習熟であれ一回で| |所知の大地全てに於いて征服し了って| |
二の[やり]方[たる]車[轍]の手綱を転じたことから| |了義[たる]大道のこ
の[車]轍を創造する| |

良縁[たる]解脱道[に]同意する(3/4)人々はこれ[に]満足しそして| |ここ
に於いて三時[に]勝者の同路[たる]道[で]| |自証[たる]大光明の住する
[考え]方(実質)全てを| |無覆 **ma sgribs/bsgribs**[で](覆蔽し了らず[に])
明らかに教示する燈火が在る| |

それ故[に]宜しく説示されたこれを発展させる[ように]ご承認なさる(4/5)
ことによって| |巻帙[で]万部([五]般若経)[たる]沢山を生じた[仏]母(般
若経)を| |無窮[の]印版の魔術に記録した| |良縁[たる]法が全てご了解
される仏語によって| |再々促された悲心の力から生起した|?|(5/6)

百の福德の作者[であること]によって| |広大な大地を守護する[に]巧みな
| |法王[たる]**bKra śis dar rgyas** と[いう]| |ご名声が梵天の世界と| |
鉄围山の間に於いても| |天の鼓 [がそうである]通り[に]流布した(6/7)彼
が| |大いなる福禄の豊饒から| |順縁を整わざる無しに完成した| |

Rig byed Nam mkhañ rdo rje が| |失誤せず明らかに書いたものは何であれ
| |**bSam ḥbrug dpal Idan** [の]弟子として承認された| |(74a7/b1)十で一
によって(十人一組で?)宜しく彫りなさい| |

何であれこれの管理とマア清浄[と]を為すことを| |廣大無辺[な]典籍に於
いて生起した聞[学と]思[量との]方[で]| |七部[たる]**dBañ phyug rgyal
mtshan** と言う彼が| |怠けること無く精進を具えることによって宜(1/2)し
く為した| |

五処(頭、喉、心、臍、秘所)の天に付いてご了解なさる日光を有つ| |**Karma**

Phrin las pa と[いう]完全[に]有名な方が| |不浄な暗闇の污垢を遠く[に]送り投げたり且つ| |消耗しない宜しい莊嚴[たる]ご恩恵を為さった| |(2/3)

それから生起した真っ白く善なる光は| |虚空の那邊に昇起が有る[と]想って| |それによつては全ての衆生は愚痴の暗黒が明らか[になつて]から| |智が顕現するのはキラキラと輝く[ように]成り了れ| |

と[いう]ことは大宮殿[たる]Chos rgyal (3/4) lhun po で印版に完成し了つてから| Thub bstan gSer mdog can と言う経院に献上したこと[それ]は善妙が増高する因と成り了れ|| ||

陀羅尼：(拙稿Ⅰに於ける現代語訳を参照頂きたい)

結頌Ⅱ：十力の衆中尊[で]Śākya の(4/5)王[たる]彼が| |無数[の]劫に於いて一百の困難により| |宜しく完成した正法[の]至宝の| |この蔵は沢山の[法]輪[の]中央に於ける梵の音[で]|| |

六十の支分の曼荼羅が(5/6)円満することによつて| |失誤なく為せと一度でなしに| |教導し了り且つ大乘[の]車の轍を分ける二は| |授記が如何であれ[それがそうである]通り[で]聖境(インド)[たる]法の湖に| |

仏教[たる]黄金の padma(蓮華)が十分に広まった| |甘美な芳香は世間目(翻訳師)が変じたが| |香りを取つて来る者(風)達の威力から有雪(チベット)[たる]ここに| |転移したことにより諸衆生は良縁を作るけれどもが| |

或は各自が同意することを基礎に設定し了つてから| |(74b7/75a1)否定すべき[と]設定すべき bshag/gshag[と]経教[と]道理[との]近似(非真実)が沢山であることによつて| |牟尼の教え(仏教)が損壊し衰退する時代[に]|| |審判案件に対してやって来た様なこの論書は| |

遍智[者で]第二の勝者[たる](1/2)Śākya の最高 mchog[で]|| |有壊[世尊]bcom ldan [ḥdas]牟尼の王が再来した如きの| |Dri med Legs pai blo gros から生起したもの[で]|| |愛惜する命[がそうである]通り[に]恭敬により書いた| |善により全ての衆生は遍智が獲得され了れかし?| |

当該資料は以上で完了するけれども、資料の文頭部分に現代語訳を省略した部分があるので、以下に補つておく。

表題、陀羅尼：(拙稿Ⅰに於ける現代語訳を参照頂きたい)

帰敬偈：三の次第[の]法輪を転じた[鉄]匣[山]を有つ| |四千によって余る
八万の門を開き了ってから| |沢山の衆生が中[観]の精舎[に]気持ち喜ぶ様
に| |牽引為さった Śākya のご子息に敬礼いたします| |

侏儒[で]変化の無数の幻化による| |強力な傲慢の調教師[たる]彼によりま
た| |汝はおみ足[の]爪の(2/3)紅い光を量るに精通する方[で]| |百の福
徳により布施した汝は賛美されるに相応しい| |

仏教[たる]水の蔵(海)を守護すべき龍王[で]| |智[の]火蘊が燃える言葉
[の]矢を有つ| |(3/4)経教[と]道理[との]射技の加行が沢山ご了解される
ことによって| |了義を完成為さる第二の導師として流布している| |

如何なる如くの意義に付いて[も]聖者のお心がお有になり且つ| |尽所有を
解説するうへ無着 Thogs pa med pa[hɪ]の仰せは| |不了[義と]了[義と]を
分けるうへ授記を証得したお方[で]| |無敗[たる]弥勒 Byams pa[hɪ]のご
子息[たる]汝は供奉されるに相応しい| |

吠陀を憶念する舌端に唱え了らず且つ| |帝釈天[たる]敵の耳に侵入
(1b5/2a1)しない| |天の上師のお心[たる]湖の如意から| |近得[相たる]
無死[の]百味の喜宴を為すべし| |